
Round ZERO **【ゼロとWな転生者】** **《試験投稿中》**

HOT RIDER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Round ZERO 【ゼロとWな転生者】 《試験投稿中》

【Nコード】

N9124Z

【作者名】

HOT RIDER

【あらすじ】

物語の守護者から突然言い渡された「転生」…タンクローリー爆発事故によって死んでしまった2人の仮面ライダー大好きなファンの男女、佐久弥立花と及川優梨子が転生したのは…ハルケギニア、所謂「ゼロの使い魔」の世界だった!?

2人の転生（ビギンズデッド）（前書き）

…これは無性にゼロ使が書きたくなった作者の無謀な挑戦物語…。
原作は呼んでいる…が、あまりに覚えることが多いので自分うまく
書けるか不安です。

主に原作知識の方面でアドバイスをもらえたらありがたいです。

2人の転生（ビギンズデッド）

英雄^{ヒーロー}：男の子であれば大半の者は憧れ、敬い、中には嫉妬するものもいるであろうか。

弱者を大いなる巨悪から身を呈して守り通し、時には孤独に打ちひしがれ、苦悩し、痛み、その先にバッドエンドが待っているようが信念を貫き通し戦う…その背中に誰も心打たれ、時にはほろりとすることもある。

仮面ライダー…このヒーローもまた心の中に生き、現代も子供達の心に勇気を与えている存在の1つ…いわゆる特撮ヒーローだ。

「異形」という仮面を被り、孤独に身をまかせながらも愛する「人達」のために戦うバイクにまたがった英雄…平成の世に入ってから、は初代から続いていた「改造人間」という要素は姿を見なくなり、「仮面ライダークウガ」、「仮面ライダーアギト」は突然もたらされた「人外なる力」を持つてしまった人間が、「仮面ライダー龍騎」や「仮面ライダー555」は「大きな力」を持った人間達の正義を貫き通す話となっている…時に「改造人間」という要素は消えるべきでなかった」という意見も聞こえるが、この平成の傾向は「大きな力がもたらす結果」というものをまざまざと見せつけられており、ある意味昭和ライダーよりも「人の中にある正義」というものを強調されているのではないかととも思える。

…そんな「仮面ライダー」というビッグタイトルが好きで止まない男女が2人…とあるオフ会の帰りにカラオケに寄り、その後とあるシヨップで「仮面ライダーオーズ」に出演する怪人の「ウヴァ（さん）」のフィギュアーツを買った後に帰路についている男女…男の名は佐久弥立花^{さくひな}、女の名は及川優梨子^{おいかわ ゆりこ}である。

この2人は2年前、どこぞの「753オフ会」というオフ会で出会い、その後親交を深めた。現在はお互いに「仮面ライダー」が好きだ。今は親友である。

お互い名前に引っかけるところと、「仮面ライダー龍騎における各仮面ライダーデッキ所持者のキャラクターの相関性について」とも何とも小難しい議論で息が合い、その後はカラオケで仮面ライダーの主題歌を歌い尽くし、はたまた某レストランで「RXステーキ」を食べたり。と、オフ会仲間からもよく「恋仲」ではないことを知らかれるほど仲睦まじいのだが、彼らいわく「兄妹でいる気分」らしく、そういつた恋仲にあることは想像できないという。まあ、その発言に特に冬とかには嫉妬の一言を浴びせられるのだが。

「スイッチはどれくらい集まりましたか？」

「俺は12個。でも40個ってなるとかなりきついよね。」

「そうですね。私はまだフリーターの身なんでまだ8個ぐらいしか。」

「今はしょうがないさ、やるべきことを終わらせた後にゆっくり楽しめばいい！」

サムズアップ、仮面ライダーが好きなものとしては一種の挨拶ともなっている。と立花いわく。真実であるかは定かではない。

フリーター。とはいっても、決して彼女がだらしのないわけではなく、彼女は現在司法試験に向けて絶賛勉強中なので色々としようがないといえる。

彼女の夢。それは「司法の面から正義を貫き通すこと」。過去に父親と一緒に見た仮面ライダー。その正義のために拳を振るう姿に幼少の気持ちはただただ感動し、いつかは生き方にも反映された。

それはここにいる彼も同じ。彼の仕事は警察官、現在は巡査として街の交番の顔となっている。

こうして「仮面ライダースピリッツ」は受け継がれていく…創始者であるあのお方も天からそんな「正義を愛する心」を見据えて笑顔でいるであろうと願いたい。

そしてその魂を持つ2人が…この直後、とある事態に直面し、そしてそこから人生を365度じっくり変えるような事態になるなど…この時誰が思っていたであろうか。

キキイーーーーー!!!

突然聞こえた甲高い…これはタイヤが道路に擦れる音だ、そしてその後続く何かが倒れたような轟音。

そして2人が轟音に気を取られ振り向いたときには…どこかで見つようなガソリンスタンドのマークが描かれているタンクローリーが…道路で横転していた。

「車が爆発するぞお　　ー！ー！！逃げろおー！ー！！」

その方向から聞こえる叫び…おそらく車を運転していた運転手であろうか。

だが2人には衝撃的な光景が見えた…横転し、歩道までに出てしまったタンクローリーの巨体に…足を挟まれ、助けを請いながら涙を流している女兒がいたからだ。

周りには誰もいない…おそらく「爆発」という単語に恐れおののいて逃げ去ったのであろう。

「臆病なぐらいがちょうどいい。そのほうが長生きする」と某探偵は言っていた…だがとある青年はこうも言っていた…「やらない後悔よりやる後悔のほうがいい」と…。

立花と優梨子はその場に荷物を放置し、いつの間にか体を動かして

いた。

彼らの正義の心が「その少女を助ける」、ただそれだけのために全神経を使い彼等はそれに身を任せていた。

「蛮勇」と言われればそれまで、「無謀」と言われればそれまで……だがもしこれで自分達が死ぬ結果になるうと……もしその行動で目の前にある「命」を助けられれば後悔はない……おそらく彼等はそう思っている。

「手を伸ばさなかったら絶対に後悔する」……とある無欲な青年の言葉を心に繰り返し、彼等は今にも漏れ出たガソリンの炎がタンクローリーの中にあるガソリンに引火しそうな中……その少女の元に辿りつき、少女を助けようと努力した。

だが何トンもある巨体、立花が素で「青春フルパワー!!!」などと叫び力を込め巨体を動かそうとするが……彼等はれっきとした人間、その巨体を動かせるはずがない。

ダイナマイトの導火線を彷彿とさせながら火は迫る……そしてその炎が完全にガソリンタンクの元へとたどり着いたとき……立花と優梨子は同時に同じ行動をとっていた。

それは少女に追いかぶさるように身を呈した爆発から守ること……優梨子が最初に少女をかばい、その2人をかばうように立花がかばう……無情にも大量のガソリンに引火、そのタンクローリーは周囲に被害をもたらしながら大爆発を起こした……その後、少女はどうなったのか、立花と優梨子はどうなったのか……しばらくは、その「無謀ながらも勇気は持っていた」2人はその真実を知る由はなかった。

……白い、とはいっても絵具や色鉛筆、クレヨンやクーピーのようなチープな白ではない。

これは存在しない白だ……周りには文字どおりに何もなく、ただただ「無」が広がっているのみ。

…もしやと思いきや、その空間にはとある男女が2人…、無論、立花と優梨子だ。

2人は先ほどこの空間に自分達がいることを認識し、なぜこのような場所にいるのかを思索していた。

そもそも自分達はあのタンクローリーに足を挟めてしまった少女を助けようと尽力し、結局自分達が身を呈しその少女をかばった…だがそれ以降の記憶については全く覚えていないし…そもそもこの空間は、自分達にある「人間的本能」が訴え続けている。

ここは人がやすやすと入る場所ではない…ここは世に「存在していない」世界であると…。

なまじそういつた方向の文化に関して詳しい2人は…まったく同タイミングで同じ言葉を発した。

「まさかここって…死後の世界！？私聞いてない！？」

御丁寧に約束のセリフまで言い、そこで笑いだす2人…だが死後の世界と認識して、ここまで楽天的な人間はそんなにいないであろう。

と、そんな2人に迫る人影、その人影はどこか幻想的な雰囲気纏わせながら、ふと2人に現れた。

そして2人はその顔を見た瞬間…驚愕した。

「「紅渡（くん）！？」」

「初めまして、おそらくあなたがたが知るであろう紅渡です。」

「瀬戸康治さんってことはキバカディケイドの撮影！？…なわけないか。」

「随分とお二人は理解力がお有りです。」

と、紅渡が言うが、この空間は余りにも異質だし…何より2人は自分が感じている「感覚」がないように感じられた…生きている人間

なら感じる体が「存在している」感覚、それがいくらどうしようが感じられない…そして記憶が知る限りおそらくあの後死んだであらう状況…走り出したときから覚悟はあったので、後悔はなし…それよりも2人には気にかかることがあった。

「あの！最後に私がかばったあの子は！？」

「…あの少女なら、あなた方の尽力により足を大きく負傷しながらも一命を取り留めました。いや、あなた方の行動の勇氣には感服いたしました。…しかし、同時に愚かでもあった。あなた2人の物語の終わりは、周りに悲しみを残すこととなるでしょう。」

渡の言うことはもつともである…おそらくあの子が足を挟め、その場で爆発に巻き込まれることは皮肉ながらも「運命」ということであつたのだろう。

だがその「運命」に介入者が2人入ったことにより、1人の終わりであつたはずのその事故は2人の終わりとして集結した…その分、降りかかってくる悲しみは大きい。

「…けど、いいと思うけどな。」

「…あなた方は本来死ぬべきではないところで死んでしまった。それでも、ですか？」

「それでも。人は遅かれ早かれ死ぬんだし。それに…あの時、最低でも俺は思った…」ここで手を伸ばさなかつたら絶対に後悔する”つて。ずっと後悔しながら生きるなんて俺はいやだね。」

「それは私も同じ。…そりゃ、少しぐらいは未練はあるかもしれないけど、それでも、私の信念に従っただけだから、私はこんな終わり方でも後悔しなければ万々歳！」

「…信念…とは？」

「…仮面ライダーのように…なんて言わない！人間として、正義に生きる、絶対に！」

それは彼らがいつも合言葉としている Motto……お互いに人を守ることを信念としてきた。

そしてその思いを果たすことができた……最期の最期に、だ。

彼等にとつては一番清々しい、とも言えるかもしれない……現世に残してきた者達の悲しみは彼等もつらいところはある、だがそれを乗り越えて生きていく人間の強さも「仮面ライダー」という物語に生きていた人たちの群像劇で見えてきたのだ、決して彼等は絶望しない。

「……やはり、あなたがたがこの世界の狭間で偶然残留したのも……因果、だったのですね。……いきなりですいませんが、あなた方にはとある世界に”転生”してもらいます。」

「転生！？それは本当か！」

「ええ。……僕は世界の物語を守りし存在。あなた方という”異分子”にははその世界に紛れ込んでしまった”悪の異分子”と戦ってもらいたいと思います。」

「……なるほど、”異分子”には”異分子”ってことね。」

「その通りです。……本来ならばその異分子を叩く仕事はほかの者が受け持っているのですが、現在彼はほかの大仕事で忙しいのです。

……本来ならば一般人の助けを求めるのは心苦しいです、しかしこの次元の狭間に迷い込んだのも何かの縁、ぜひともあなた方にはその世界で新たな人生を歩み、その世界で戦ってほしい。お願いします、もちろん、あなた方がよければ、の話ですが……。」

「……もしそれを断れば、俺達はどうなるんだ？」

「そのまま生命の輪廻の一部となり、魂をリセットされてその魂はまた新しい命となる。……いわば普通の人達と同じです。」

「……よし乗った！」

「いいのですか!？」

まさかこんなに早く、それも即決してれるとは思っていなかった渡、

自分からその「戦い」に殴りこむ…勇気があるし、話の筋からおそらく「異世界」であると理解しているはず…右も左もわからない世界で生きることをご容認する…これも勇気があることだ。

「その話から、おそらくほかの候補者もいるとは思う。だが他の人に押し付けるつても俺としては気が乗らないんだよ。…おそらくその話の筋だと、その異分子は危険なんだろう？」

「ええ。その異分子はその世界の正史を破壊し、さらにはその世界の理すべてを破壊します。」

「いいじゃん、その世界を守るヒーローつてのもさ。」

「そうよ！でも自分を過信しているわけではない。危険なものもわかる、けれど…その危険に立ち向かって、人を守ってきたヒーローの背中を私たちはずっと見てきたから、それに及ぶかは分からないけど…でも、自分で出来ることなら！」

「…感謝します。ですがその世界では危険が待っているのは必然。さらにはあなた方が住んできた世界とはまったく仕組みが違いますから。」

「どんな世界なの？」

「…ゼロの使い魔、という小説は御存じでしょうか？」

「ゼロの使い魔って…あのゼロの使い魔！？」

「まさかどこかのネット小説みたいなことになるとは…不思議だなあ、まったく。…てことは、なるほど、魔法の世界か。」

魔法…ゼロの使い魔の世界は各々が抱いているような魔法と大差はない。

火を放ち、傷を治し、突風を起こし、金属を作り出す…貴族と平民という2つの枠組みが存在し、地球で言う中世のヨーロッパの世界を再現したような世界…魔法、ともなると確かに危険は付きまとう、あそここの世界には亜人やドラゴンといったモンスターも存在するし、今の平和な日本より何百倍も危険な世界だ。

「その世界であなた方はとある貴族の双子として転生してもらいます。」

「ふ、双子!? まあ、2人同時つてのは納得できるが…。」

今まで仲が良かった親友が突然自分と地を分かち合う双子となった…なんてノスタルジーでなんて唐突でなんと奇妙な話であろう。

…が、ド天然である上で超ポジティブスキルを持っている優梨子からしてみれば…

「何それ面白そう!」

「…言うと思った。」

まあ…立花の中では優梨子は親友というより妹みたいな存在であつたし、決して恋感情とか持ったことはなかったからまだ気まずいこととはないであろう。

「…そして、あなた方にはその”救世の戦士”となるべくスキルをいくつか与えます。…ですが、その他にも御所望したものが2人になれば…1つだけなら。」

能力付加、というのはいちよやお約束であるし自分達はその異分子とやらを倒すために転生するのだから納得できる。

それにプラスとして特典も付けてくれるのだからありがたい…と2人は模索していると、ふと目が合い…そのアイコンタクトでお互いの意思を確認すると、2人は一糸間違えぬ息で同時に述べた。

「Wドライバーとガイアメモリ!」

「…なるほど、2人で1人、中睦まじいですね。…一応聞きますが、ロストドライバーは?」

「あ、ほしいかも。」

「…それも付けておきますね。ですがその存在自体は秘匿をお願いします。」

「まあだろうな…。」

「それが原因でドーパントなんかだ出てきちゃったら私も困るし。」

その暁には2人の探偵事務所が建ってしまう事態になるであろう。

「…それでは、出発の時のようですね。」

そう渡が宣言すると、2人の背後に突如銀色のオーロラが現れる。

これも理解している…仮面ライダーディケイドに出てくる異世界への扉だ。

「…それでは、自分から頼んでおいて、というのもなんでしょうが…どうかご無事で。」

「…ああ。」

「もっちろん！」

ただのその会話だけを交わし2人は…揺らめくオーロラの中へと勇氣を持って足を踏み入れた。

それを見届けた渡…と、小さなオーロラ越しからとある世界の様子を確認していると…渡のポケットから、彼の相棒である蝙蝠…キバツトが姿を現した。

「渡、そんなにあいつらのことが不安か？」

「…あの方たちに必要な力は与えました。ですが…。」

「偶然見つけたただの一般人にすぎない。確かに、あのお願いを引き受けてくれのは超ラッキーだった。…お前も、実はあいつらたち

が良かったんだろう?」

「…彼らが見せてくれた勇氣、僕が言ったようにあれは無謀だったけれど…」

「心を打たれた。…それでいいと思うぜ。渡はあいつらの正義の心に、その無謀ともいえる勇氣に感動した、それに、あいつらだったら全力で頑張ってくれると俺は思う!」

「…そうだねキバツト。最低でも自分の身を守る力は託したから…苦戦してるようだね、行くよキバツト!」

「よっしゃ!キバツて行くぜ!…ガブツ!」

彼もまた正義を愛する仮面ライダー…人の中にある「音楽」を守りたいと願い、守りとおした戦士…仮面ライダーキバ。

そして…正義の系譜は…。

「おめでとうございます奥様!男女の元気な双子ですよ!」

とある貴族の家に響いた…元気な産声から、物語は始まる。

舞台はハルケギニア…魔法の世界の物語の始まり。

ブレイ家の双子

ブレイ家：「ルクセン・アル・スペー・ド・ブレイ」の代から続く比較的新興貴族であり、領地も：広大である、とはいえない大きさ、いわばあまり力のない貴族の部類に入るが、農耕に至っては順調であり納税の面に関しても安定している、借金もなし：平穩である、というのがこのブレイ家であろうか。

貴族の中には領地の管理、村民の管理を厳かにするものも見受けられるが、このブレイ家：少なくとも、現在の代である「ヤン・ソーンボルト・ノーク・ド・ブレイ」子爵はそういった部類ではなく、むしろ領地民からの信頼はとても厚い、彼は類を見ない努力家でもあり、同時にちよつとしたカリスマも持つ一定の「実力者」である。

そんなヤンの妻は「メリー・ヴラ・ド・ゲート・ブレイ」は献身的な妻：少しドジな面がありつつも周りにのほほんとした雰囲気を一瞬にして作り出すある意味カリスマ：そんな妻の存在がヤンの努力の力となる：と、同時にこの夫婦は砂糖にはちみつとチョコソースをかけたように甘い空気を作り出す、それは現在でも、そしてこれからずつと変わらないであろう。

：そんな仲睦まじい夫婦の間にもついに新しき命：次なる世代の鼓動がやってきた。

その命は：双子、その情報を聞いたときはさすがにブレイも迷ったが。

双子：もしどちらも男児であつたら、おそらく遠くない未来に後継ぎ騒ぎが起こる可能性大であるからだ、幸い自分の家系は王族ではないがそれでも貴族での後継ぎ問題は実にシビア、特に双子というものは面倒なことになる可能性は特大。

新しき命には大変申し訳ないが、ここは男児1人、女児1人、というベストな配置でいてほしい：女児2人、というのも色々と面倒で

はあるが。

こうして念願がなつてやつてきた出産日：ヤンが当日メリー以上にどたばたしながらも：無事、新しき命の産声は上がったのだった。

嬉々迫るヤンはその愛おしき子供の顔を確認すると：1人は女兒、1人は男児：と、ヤンが願ったようなベストカップルでその顔を現してくれた。

もちろん新しき命は大歓迎であるし、何より未来の不安の芽が1つ減ったことにヤンは狂信者ではないにしろ始祖ブリミルに感謝した日である。

4年後、正確には4年と半年が過ぎた頃合：今年の農耕の調子を書類と見聞で確認するヤンの書斎室に不意とノックが響く。

ドアの比較的下側から響くノック：となると心当たりは2人しかいなかった。

「入っていいぞ。」

「しつれいします、おとうさま。」

「おじゃまいたします、おとうさま。」

ほかでもない愛おしき息子、その子独特の黒髪と金の瞳を持つ「ブレイブ・ノクト・トー・ド・ブレイ」と愛おしき娘、メリー譲りのきれいな緑の髪と銀の瞳を持つ「リリウム・フリー・ド・ブレイ」である。

：ヤンいわく「この子の将来が楽しみ」と言われている、ヤンいわく「才がある努力家」である自慢の娘息子。

どちらも1歳半からしゃべり始め、わずか半月でしゃべりをマスター、さらには3歳を過ぎた頃には魔法関係の書物を主に興味を持ち始め、さらにはヤンの愛読書である領地管理学の本も滅入るように

読み始めた、驚くべきはその内容を幼少の子供とは思えないスピードでマスターしたこと。

赤ん坊のころからどこか異質な、こつ、落ち着き過ぎている雰囲気を持つていることは「各々の性格」と理解できた、だがどちらもうして4歳とは思えないほどの学習能力と、何より態度だ。

わがままも言わず、だだをこねることもなく、時にはヤンの領地偵察に自分から同行すると…こつなると、ヤンにはあと半年ほどである「杖契約」つまりメイジとしてのデビューが楽しみでしょうがない、おかげで大量の魔法関係の本を買ってきてしまったほど…親バ力である、だからこそこつ「子供ぼくなく」「子供たちにどこかさびしさすら感じているのだが…」。

「ほんじつはりょうちていさつをどうこつさせていただくべくまいりました。」

「わたしはあたらしいほんをかりにまいりました。」

「子供達よ…確かに少し前に”父として敬うように”とはいったが…こつ、なんとというか、他人行儀？な言葉使いもやめてくれないか？なんか…お父さん、拗ねちゃうぞ？」

親バ力である…本当はコミュニケーション能力も大事な貴族にとって重要な「順能力」に長けているためほめるべきところなのだが…だが、気持ちも少しだけわからなくもない。

「りょうかいしました。それではこついうかんじでよろしいでしょうか？」

「…それ、変わったのかい？」

…まあ、こついたりリウムの超マイペースな部分に癒されることもあり、ヤンの心は荒れているわけではない。

むしろ、このマイペースでのほんとしている雰囲気は妻の影を感じ

じまたおそらく本を読んでいるであろうメリーのことを愛おしく感じるわけだが…。

メリーは現在病を患っており、絶賛療養中のみである…水のメイジの見立てでは、後1年弱は魔法と薬による治療によって感知するらしいが、それでも妻が大好きでしようがないヤンは不安で不安でしようがないのだ。

だが、それが理由で領地管理を厳かにした…ということになれば笑えない、今は元気がない妻のためにもヤンは一層と奮迅するのであった。

「…しかし、そうか、もうそんな時間か。」

「おとうさまはさくやからごむりをしているようすだそうで。エイからききました。」

「…無理、か。まあ、徹夜はしていたが…。」

「それならほんじつはおやすみになっては。ほんじつはリリウムとおべんきょうをしていますので。」

「…ブレイブのいうことも一理あるか…すまん、それでは今日の視察は中止とする。ただし、この前みたいに熱中し過ぎるなよ?」

「…こころえました、おとうさま。」

そう言葉を残し愛おしき子供達は自分達の部屋に帰還した。

…だが最後のまるでメイドみたいな返事はヤンの心にはどうしてもひっかかった…いや、父を尊敬していることはわかるのだが…。

「…私はそんなに信用がないのだろうか?それとも…パパとの時間が少なかつたせいで見切られた!? パンショーツク!?」

…過敏すぎるのも問題である。

ここはブレイ家の一角にある子供部屋…とはいっても通常の子供部屋よりはサイズが広い。

それもそうだ、ブレイ家の子供は双子、2人ということは自然と部屋も広くなる…とはいっても、どうみても2人部屋にしても広いのが現状…さすが生粋の親バカ夫婦である。

さらに目を見張るは部屋の一角にある本棚の特大な大きさとそれに見合う本の多さである…一応歳相応の子供の玩具はそんざいするがそれもかなり、いやほとんどない。

ここにいる2人の子供は…転生者、ブレイブは生前は佐久弥立花で、リリウムは及川優梨子、生前の精神年齢を加算すれば彼らの精神年齢は29歳…とはるかに上をいつている、なので5歳児が興味を持つ玩具に興味を持つ歳でもないし、さらにいうならここは異世界、それも彼らの時代で言う「中世のヨーロッパ」に近い世界…玩具もどうも古臭いものばかり。

消去法で彼らの暇つぶしといえば…前の世界ではなかったような本…しいて言えば魔法関係の書物や貴族における領地管理関係の書物などぐらいしかなかったのである…おかげでたいいの呪文のスペルは頭に入ってしまったているが。

…今日は専属メイドであるエイも故郷であるタルブへと里帰りし、代役のメイドも厄介途中、現在この部屋およびこの部屋の周囲はこの2人だけである。

…だが念には念のため、リリウムはベッドの奥の奥、さらには簡単な仕掛けを施した小物箱から自分の手せいである簡易的な杖を取り出し「サイレント」…周囲に音を通じさせないコモンマジックと同レベルである風属性の魔法を唱え完全防備となった。

これは彼女の能力の一端「魔道具の作成スキル」から作ったもので、リリウムいわく「本を読んだら簡単にできた」だそうだ。

とはいっても簡易的なもの…契約を介さないいわば「量産品」なのでせいぜいコモンマジックぐらいでしか精巧に発動できないが。

しかしなぜ魔法まで唱えてまわりに警戒するか…これからの2人の話は「転生者」としての話となるからだ。

「…で、どうするの？物語に介入する？」

物語に介入…つまりはこの「ゼロの使い魔」という世界でこれから起こるであろう出来事に介入するか…ということ、「物語」ライトノベルとしてこの世界を把握している転生者だからこそできる荒業である。

だがこの世界はおそらく「正史」…つまり物語の本筋は通らないと推測できる…なぜなら転生させた渡入っていたからだ…「物語を破壊する存在がいる」と…。

「…そうだな、この歳になればある程度行動の余地は増えるし…とにかく、今は力を蓄えよう。」

力…それは貴族、メイジであるが故の特権…「魔法」だ。

確かに大きな力…「Wドライバー&ロストドライバー&ガイアメモリ」は所有している（いつのまに化おもちゃ箱に混入していた）、だがあの力は一般のメイジに使うには大きすぎる力であるし、おそらく「異端」扱いされるか「戦争の兵器」として利用されるか…悲しいが、どちらにせよマイナスなことしか思いつかない。

「…ところで、例のモノの構想はまとまってるか？」

「今のところは順調！でも材料は大丈夫なの？」

「そこはエイに無理を言っただけでがんばってもらってる。でもどうやって父さんに納得させるか迷ってる。」

「なら市場で買うことにして、そこで偶然見つけた変わり物…でいいんじゃない？」

「…ふむ、そうか、エイの知り合いに商人の伝手がいたはず。ありがとうりりウム、そうするよー！」

「えへへー。」

ブレイブがリリウムの頭を撫でる…転生前の彼らを知っているものにとっては「お前ら付き合えよ」とよく言われた光景であるがやはりどう風向きが向いても彼らに「恋愛感情」はない…、なぜかないそれに双子で恋人は…色々とアウトである。

…夕食前のブレイ家にはここ最近とある慣習がある。
それは…

「おかあさま、ほんじつのゆうしょくをもってまいりました。」

「今日もありがとうね、リリウム。」

ブレイブとリリウムが交代制で寝室で寝たきりの母…メリーに夕食を持ってくることである。

先述のとおり彼らの母であるメリーは現在患っている身であり、おそらく命に危険がないにしろ病持ち…本来ならここはメイドの仕事であるうが、これは彼女メリー自身の所望でもあった。

「せめて子供の顔は毎日見たい」という母親の切なる願いである…その願いは子供たちにも通じ、夕食前以外も…特に基本家の中で過ごすリリウムは顔を見せに事あるごとにやってくるのだ。

「でもリリウムとブレイブももうすぐ5歳ですか。時がたつのは早いですねえ。」

「えへへ。大きくなったでしょ?」

優しくなでるメリーにリリウムは一気に精神年齢が減少するのだ。
これは彼女の境遇の関係がある…生前、及川優梨子は母親を病気で

失っており、小さいころの出来事であつたため彼女は「母親のぬくもり」を知らずに生きてきた。

しかし自分はこれで2回目の人生…目の前には2人目の母であり実質初めて触れあつた「実の母」でもある…そんな彼女の手のぬくもりが、リリウム…及川優梨子という魂を、まさに5歳児の如く戻してしまふ…しかしそのぬくもりは優しい、自分の肌でそのぬくもりを感じて入ることに幸せを感じるのであつた。

「5歳…となるとあなた方は杖契約…ついにメイジデビューなのですね。リリウムはどの属性になりたい？」

属性：土、水、風、火、そして幻の属性として虚無…虚無は例外として除き可能性があるので4つの属性…主に魔法の属性は親の遺伝が多分に影響してくるので、大体は察することができるのだが。

ちなみにヤンは風のトライアングル、メリーは土のトライアングルである。

「わたしはみずのぞくせいがいいです！」

「おや？どちらでもないのですね？」

「はい！しょもつでしらべましたが、みずのすくうえあになればたいていのびょうきのちりょうはかのうだそうなので、はやくみずのぞくせいをきわめておかあさまをらくにしてあげたいのです！だつておかあさま、ときどきすごくくるしそうなんだもの。」

「…リリウム。」

娘の愛はメリーの心に何倍にも増幅され、同時にその許容量を超えた感情が「涙」という形で具現化する、おそらく病の身というのはかなり心の負担となるであろう、自分は迷惑をかけっぱなしで、子供たちとも遊ぶことができない…たまっていた感情でもあるのだらう。

「…では水を極めて、私だけでなく民達のことも助けられる立派なメイジになりなさい。」

「はい、おかあさま！」

…ちなみに偶に部屋の前を通りかかったとある某親バカパパがこの話を聞きメリー以上に号泣した挙句夕食時にも涙を流し続けた
…とか、余談でしかない。

運命の剣

トリステイン王国の首都「トリスタニア」、首都という名の恥じぬぐらい人があふれかえり、活気が感じられる、まさに「人と金が交錯する場所」という感覚、と言えば…わからないであろうか。

ここからブレイ家領地までは約1日…この世界に来て、初めて車というもののありがたみを、転生者であるブレイブとリリウムが感じたきっかけでもある。

だが彼らのそばにはいつものように親バカパパであるヤンがいない…本日はブレイブがヤンを説得してリリウムと2人…そして専属メイドであるエイもつれてやってきたのだ。

今回のトリスタニア出向の目的は「自分の目でふさわしい杖を見定めるため」という名目だ、2週間後にはブレイブたちの5歳の誕生日…つまりは杖契約を行う日、つまりは晴れてメイジデビューとなる。

そのための杖は本来ならヤンがいつもマジックアイテムを頼んでいる伝手に頼もうと思っていたらしいが、ブレイブとリリウムの本場に珍しいわがまま「自分達に杖を選ばせてほしい」というわがままが浮上し、何年かぶりに聞いた子供たちのわがままに親バカであるヤンは即答で了承を出した。

だがそのあとが問題であった…ブレイブの要求2はこうだ、「自分とともにする相棒ともなる存在、その存在は自分達の眼だけで見定めたい、さらに歳を考えれば自分達は独り立ちという将来を考えなければならぬ、そのための予行演習として自分達とメイドだけでいかせてほしい」という要求、これには先述の通り親バカであるヤンは渋った、彼らはまだ魔法も使えない貴族、金に飢えている愚者達にとってはいい金づるおよび脅迫材料（実際にはコモンマジックは使える）、何よりかわいい子供達を危険な目に合わせたくない…親の切なる願いだ。

だがブレイブたちが本当に何年振りかにはつきりといったわがまま、しかもかなり必死な様子だ…ここは巢立ちを見送る親鳥の気持ちで見送ろう…と、トリスタニアと旅立った馬車をヤンはずっと泣きながら見送って行った…だがブレイブは気付いている、自分がいわば地球の番組で言う「はじめてのおつかい」状態…つまりカメラマン…および「偵察者」がいることを。

「…気付いているぞ、ヴァオー。」

「ハツハアー…！さすがブレイブ様だ！1分足らずで俺の気配に気づくとはわなあ…！」

「伊達にお前達から訓練を受けていないからな。」

説明しよう、彼、否彼ら…ヴァオーをはじめとするブレイ家暗部組織、名を「ORCA旅団」。

…ブレイ家の領地の周りにも、もちろん他の貴族の領地が存在する…が、偶然が重なり周辺の領地は荒れ果ててしまい、平民たちは生活に困っていた。

…そんな中、平民の選択肢としては「夜逃げ」…つまり他の領地へと逃げ込もうとする平民がいるのだ。

本来ならそんな平民などたいていの貴族は厄介払いするのだが、ヤンのモットーとして「百を知るまで見聞せよ」というものがある…ブレイ家の領地は小さい分、領地の管理や警備が行き通っている…つまりは夜逃げした平民がどこからか入ってくるのがすぐに把握できる、ヤンはそんな夜逃げした平民の元へ行き、平民が前に住んでいた領地の状態、扱い、そして夜逃げに至った経緯…それをしっかりと調べ上げ、「脱するに値した状態であった」と判断するとその平民を受け入れてくれるのである。

だが条件もある、新しい農地の開墾を手伝う代わりに、他のものより多めの納税など…だが生活の補助も手伝ってくれる貴族などなかないない、おかげでそういった他の貴族とは一線を画した行動を

とすることでヤンは信頼を獲得しているのだ。

だがそういった甘い話を聞きつけて嘘を吐き領地に取り入ろうとする輩がいる…だがそういったものは気をつけてほしい、ブレイ家にはどんな組織よりも強く、何より隠密行動に長ける組織「ORCA旅団」がいることを…。

彼等は先述の「夜逃げしてきた平民」の中から戦闘経験があるものや、改心しながらも犯罪歴がありまともに働けない…そういった「わけあり」の人達を集めた傭兵集団、そういったものは大体现役の時の腕を持てあましていくものが多く、かなりの手慣れも多い、さらには高待遇で雇ってくれるために旅団メンバーの信頼もヤンは厚い…もともとはそういった「戦っていた」もの達を統括する組織を作ろうとしたのだが…このORCA、ここ最近で一番多い仕事は…そう、親バカのヤンの名は伊達にあらず、子供達の「護衛」である…だがこの組織は隠れてとある仕事をしている…それは彼ら、ブレイとリリウムの戦闘訓練の相手、そして彼らが親に秘密で所望するアイテムの採集…彼らが幼少ながらも簡易の杖を作れたり、「例のモノ」を作れたのも彼らの暗躍である。故にブレイ達とORCAの関係は深く、なによりブレイとリリウムはあの歳でORCAの信頼を集めている。おそらく「雰囲気」に過敏である彼らだからこそ感じた「異質さ」に惹かれたのかもしれない…閑話休題。

「と、いうわけでORCAの皆さまは本日のことに関しての秘匿をお願いいたします。」

「リリウム様からのお達しだあ！！真改い！！」

「…心得た。」

ヴァオーのように商人に変装したのではなく、真改は気配を消しながら物陰から見守っている…この2人がいれば大丈夫であろう…襲ってくる貴族がいれば、この2人によって下水道のネズミのえさに

なるの絵が見えてしまう。

…実を言うとこのそばにいる専属メイドのエイはORCAのトップ3だという…なるほど、どおりでその歳で子供たちの専属をしているわけだ。

気を取り直しブレイブ一行が向かったのは大通りであるブルドンネから外れ、裏通りのチクトンネ街に近い場所…ここにとある小さな工房…鍛冶屋がある。

だが看板もなく名前もない鍛冶屋だ…ここはまさに文字通り「隠れた名鍛冶職人」がいる場所らしく、そこにブレイブが所望していた物がある。

少し立てつけの悪いドアを開くと…そこには今まさに加熱した鉄を伸ばしている最中である鍛冶職人…職人、というオーラを纏うガタイのいい白髪の男がいた。

「う？…なんだ貴族か。うちには貴族が好むようなければい剣は置いてないぜ。」

「…私だ。」

「！おお！真改じゃねえか！」

この職人は剣の使い手である真改に教えてもらった…ブレイブがある日ORCAメンバーに「腕のいい鍛冶職人はいないか」と聞いたところずばりと剣を使う真改がここを教えてくれたのだ…名もない鍛冶工場、確かにその手の専門家でなければここを知ることができなかったであろう。

「真改がいる…てことは、あんちゃんか？あの剣の依頼主ってのは。」

「その通りです。…初めまして、ブレイ家の長男、今現在ブレイ家の次期領主を名乗らせてもらっています、ブレイブ・ノクト・トー・

ド・ブレイです。」

同じくブレイ家長女のリリウム・フリー・ド・ブレイです。以後お見知りおきを。」

「ほおー！こりゃ驚いた。」

「驚いた、と申しますと？」

「いやいや、俺は癖で貴族相手でもこんな口癖になっちまうからよく喧嘩に発展するんだけどよ、あんたらは貴族の餓鬼にしてはよくできた、いや大人以上によくできた人間だ！」

「…俺の尊敬する主だ。」

「はっはっは。いいぜ、真改の気に入った理由がわかったような気がするぜ。それにブレイ家はここらでも評判がいいからよ！…ほれ！依頼の品だ！」

愉快に大笑いしながら工場の奥に向かい、そこからせせと急ぎながら主人が運んできたのは…なんの装飾もされていない一本の鞘…否、その鞘に小さくトリステインの文字でこう書かれていた。

「永遠の切り札、ここにあり」と…。

「御依頼通りしっかりと例の代物と魔力結合するように作つといたぜ！…そうだ、さっそくここで振ってみな！振ってみてな、俺はその剣とその持ち主が相性ピッタリかすぐにわかつちまうんだ！」

「…わかった。」

そーいブレイブはその鞘からゆっくりと剣…バスタードソードを抜く…剣の長さはブレイブの身長に合わせ80センチの長さである。その剣は…いっさいの装飾はなし、まさに「剣」という存在事態の危険な美しさを体現したような剣…そして柄の部分には…まるで血を駆け廻るように魔力を剣に行き渡らせている霊石…アマダムが存在する。

その霊石をしっかりとみつめ、自分の背を預けるような感覚を発動

させ、靈石の「神秘なる力」との共存を図る…そしてその石と「呼吸」を同調させたときに…ブレイブは一心に…振り切った。

その斬は工場のよどんだ空気を斬り…まるでその斬った空から生命力漲るような新鮮な空気が混じったような感覚に陥る。

そしてその様子を見た主人は笑顔でうなずいた。

「よし！お前と剣はピッタリな息だな！しかしここまでピッタリ、
ても逆に怖いな！がっはっは！」

「…守りたい、と思ったからな。この靈石はその者の感情によつて力を与えてくれる。悪しき者には狂気の力を…そして正義を思う守護者には守る力を。この靈石と俺の願いは同調した、それだけだ。」

「うむ！その心意気やよし！俺も珍しい剣を作つてそれにぴったりな主を見定めた！気分がいいつてもんよ！」

「…うむ、あなたは信用に値する名工であつた。…エイ、報酬金を。」

「はい。」

エイの懐から出された子袋…とは言えない大きさの袋、そのサイズに驚き主人が中身を確認すると…一本の剣の買い取り金額とは思えないような枚数の金貨の枚数であつた。

「占めて50000エキューだ。」

「う、50000!?とんでもねえ金額だ!？」

「…この世とは”血筋”と”性別”の固定概念により人が支配されている世界…だがこの仕組みは余りにも古いし、なにより非効率的だ。…実力あるものがのし上がる社会、それが正しい身分の在り方だと自分は思っている…そしてそれがブレイ家の総意だ。…自分は質で金額を判断しました、それだけです。そしてあなたは僕の信用に値する鍛冶職人だ。いくら土のスクウェアメイジとはいえ、あなたのような本物の剣は作れない。希少価値がある。」

「はっはっはっはっははははははは！！その考えじゃいつか異端扱
いされそうだな！」

「革命、というものは…すべてがその時代における異端ですよ。」「
肝が据わって物わかりのある貴族なら大歓迎だ！それじゃああ
りがたく受けとっておくぜ！」

「こちらこそ感謝します。…それと、あなたにはいつかブレイ家専
属の鍛冶職人になってもらいたいと思っております。」

「俺がかい！？おいおい、貴族が好きのような剣は作れねエゼ！」

「剣は身分と力の象徴ではありません。いかに美しく斬れ、いかに
しなやかで、どれだけ断ち切るものか…それが剣の本質なのでは？」

「はっはは！いやー！あんた本当にもうすぐ5歳の貴族かい！？」

「ええ、これほどまでになく。…お名前は？」

「アレストスだ！いいぜ！その話乗ってやった！ブレイ家の専属に
なればまた物珍しいものを作れそうだからな！」

こうして去って行ったブレイブの背中には…アレストスいわく、「俺
が見た中でも誰より貴族であった」と言っている。

…トリスタニアの表通りにある大衆食堂は、あまり貴族は入らない、
貴族達には変に確執したプライドがあり、「平民と食事を共にする
のは御免だ」と言っているくらいである。

だが飯のまずい店ならともかく、この店はうまいことが確信を持っ
て言える…おかげでブレイ家がトリスタニアに出向した際はかなら
ず寄っているほどだ。

「いらつしやいませ！…あら！ブレイ家のブレイブ様にリリウム様
じゃないの！」

「お久しぶりです。」

「相変わらず盛況のようですね。」

「おかげさまでね！おや？様子を見るとヤン様は来てないようだけど？」

「今日は僕とリリウム、そしてエイの3人だけでやってきたんですよ。」

「おやま！まだ5歳近くなのに偉いわねえ！さあさあ、空いてる席に座ってくんない！」

… 貴族と平民、この隔たりは絶対的であり、なにより明確である… このトリステインの仕組みを知っているものは違和感を覚えたであろう、いくらまだ5歳近くだとはいえども彼等は貴族の血縁者である、なのにこの食堂のおばさんはあまりにもフランクすぎやしないだろうか、という疑問が浮かんだであろう。

実はこれはブライ家領主のヤンが直々にそうしろ、フランクに対応してくれ、と頼んでいるのだ。

これはブレイ家が代々続いている伝統みたいなもので、「平民は家畜ではない」という先代からの教えにのっとってヤンはこうしているらしい、それにヤンもそうしてくれたほうが楽であった。

もちろん最初はそれに違和感を覚えた周りであったが、時間が経過しそれはすっかり定着、今ではこの食堂の常連はフランクに接している。

… まあある程度の分別は付けるし、他の貴族の前ではそうすることはできない… ブレイ家の考えは独特かつ周りの凝り固まった思想の貴族達には「異端」でしかなく反感を買う機会が多い… それでもヤン一同はこの考えを取りやめる気はないが… そういった毅然名面でも平民からの信頼は厚い原因の1つでもある。

もともとほかの世界の常識を持つ転生者であるリリウムとブレイブもこの対処には感謝した。

なにせ元の世界では貴族なんてものはごく少数、しかもここまで確執的な隔たりはなかった、つまりはただ「慣れてない」のだ。

だからこそこうして仲の良い友達の娘息子のように扱ってくれるこの店の常連は大好きであったし、話しやすい相手でもある。

おばさんに紹介されたように席を座るブレイブ、リリウム、エイの3人、だがここでブレイブがエイに小言で「席をはずしてくれ」と指令した。

それに黙って従うエイ…彼女はいつもみている、ブレイブとリリウムの2人だけが話すような話し合いの時、2人は5歳にもなっていないとは思えないような真剣な顔を見せることを。

だからこそエイは何も言わないし、ブレイブはただその配慮に心から感謝するだけである。

エイが席をはずした後には、リリウムは秘密裏に「サイレント」の魔法をかける…完全準備、これからの2人は「転生者」として話し合う。

「…これでブレイブの杖…というより剣はできたわね。」

「ああ、霊石…アマダムと剣の融合による杖と剣の完全ハイブリック化の試作品、まあまだ魔法を試していないけど。」

アマダム…それは仮面ライダークウガで出てくる霊石であり、クウガの力の根源でもある。

時には悪しき力を与え、時には笑顔を守る力をくれる…決まった属性もなければ、きまつた力の上限もない、まさに無限の可能性を秘めし石。

実を言うとこのアマダムの制作は簡単であった…リリウムに付加されていた「マジックアイテムを作るスキル」とこの世界に存在する「精霊石」の概念を用いて。

精霊石…文字通り精霊の力が込められた石である…火の精霊石は火を司り、水の精霊石は水を司る…なら精霊石の一種ともいえるアマダムはどんな力を司っているか…それは「人の感情による霊力」つまり「人の感情」によって形成されていたのである。

リリウムのアマダムの解釈はこうだ、「人の感情」という下地からなり、そこに「火」や「水」の力が介入したことにより「超変身」をする…そして「アルティメット」がなぜ制御できたか…それはアマダムの「感情」を司る力によって優し心に反応したアマダムがアルティメットを「優しき戦士」へと昇華させた…というわけである。感情を司る…というのには根拠がある、それはクウガの不完全な形態である「グロージングフォーム」あれは雄介の戦い決意が足りなかったためになった形態…こういった面で、心が反映される…となるとこういった解釈ができる。

さらにリリウムは言葉が続ける、クウガの変身フォームを確認すると「火」を司る「マイティフォーム」、「水」を司る「ドラゴンフォーム」、「風」をつかさどる「ペガサスフォーム」、「大地」を司る「タイタンフォーム」…この4つのフォームは司りしは4つの属性…つまりは、この力を行使できるアマダムは、この世界のような魔法が起源と関係しているのではないか、という推測。

確かにこの属性は所謂「魔法の属性」と一致し、そう考えるとアルティメットは…「虚無」と呼ぶにふさわしい。

アルティメットフォーム…すさまじい闇を作り出す存在で、クウガが「なつて行けない姿」。

確かにあの圧倒的力は「虚無」ともいえる存在であるし、ほかの民族から虚無の使い手は「悪魔」とも呼ばれることがある……こういうところでクウガとの共通点らしき要素、仮面ライダーファンとしてむねがわくわくする。

そしてアマダムがこの世界の魔法と同じような力を起源としているなら…リリウムの「マジックアイテム作成のスキル」で応用を利かして作れることに納得がある程度行く。

「いやしかし…よくそこまでよくがんばってくれたな、リリウム。」
「えへへー」。

リリウム：生前及川優梨子は自分が好きな存在から頭を撫でなでてくれることを何よりも生きがいとしている。

その行動のより自分の周りに人がいて、そして「愛」がある…そう感じれることが大好きなのだ。

しかし彼女のやったことは大きい、確かにトリスティンには杖に付属的に剣としての性能があるようなものはあるが…完全に剣と杖として機能し、なおかつ見たことがないであろうアマダムを利用した無限の可能性を秘めた剣：工場の主人アレストスが「珍しい」というのも納得であろう。

…と、リリウムが本能で感じた…自分の昼食の香り。

見れば、自分達の席に運ぶであろう食事を持ったおばさんがこちらに向かつてきていた。

食事の時間か…とリリウムはサイレントの呪文を解除、食堂の騒がしい音や声が一斉に聞こえ出す。

「あんたらまた凜々しい顔で話し合ってたよね？一体何を話してたんだい？」

「ええ、2週間後には自分達は5歳…貴族として第一歩を歩くことになります。考えていたのですよ…貴族としての在り方、をね？」

「いやいやほんとにブレイ家の人達の優しさには涙が出るよ。」

「そうか！ブレイぼっちゃんにリリウム穰さんも5歳か！時がたつのは早いな！よし！今日は坊っちゃん達の5歳記念で酒一杯持つてこい！」

ブレイの後ろにいた…自分達が赤ん坊のことから知っているというお爺さんが囁きたと、食堂が一瞬にして祭りムードに変貌してしまった。

…まあ、今日は遅いためにこちらで宿泊しようとか考えていたし、夕食にはちょうどいいであろうか…まだ昼食の時間であるが。

こうしてブレイ家と親交を持っている食堂のお得意さん他の平民達で絵に描いたように飲めや歌えやの騒ぎとなり、結局護衛任務に就いていたはずのヴァオーも悪乗りして参加、その日の食堂の売り上げは通常の3倍にもなったという。

…貴族の在り方。

こブレイブとリリウムの「貴族の振る舞い」は完全に自分でイメージを固め、作り上げた「ブレイ家」という人格である。

彼等は貴族の振る舞いなど知る由はなかった…だがブレイ家のあり方を知り単純に彼等は感動した。

貴族と平民の隔たりが強い風潮の中、それにあえて逆らおうとする勇氣と人格…原作で貴族達の醜態を見ている彼らだからこそもっと感動した。

だからこそ「ブレイ家」としての在り方を貫き通そう、そう彼等は行動してきた…だが彼らにも「疲れ」というものは存在する。

その日の夜は、専属メイドであるエイの腕枕のもとで2人は夢の世界に入ってしまったという。

運命の剣（後書き）

独自設定全開の回。

アマダムの解釈ってかなり妄想多めだけどこんな感じだよね？おそろく…。

覚醒 〈目覚める雷鳴〉

「まあ、ブレイブとリリウムの紹介する必要もなかるうが…。」

「本日からお二人の魔法指導担当となったメルツエルです。以後よろしくお願いいたします。」

「ええ、よろしくおねがいしますめるつえるさん。」

「わたしからもよろしくおねがいします。」

…本日はブレイブとリリウムの由緒正しき5歳の誕生日であり…彼らの晴々しいメイジデビューの日だ。

夕方からは家の者全員で誕生日を祝うこととなっている…この規模と言ったら伊達じゃない、なにせメイド全員にまでいつも貴族が食しているような豪華な夕食を振る舞い、領地の全員の民に恩赦として祝い品を提供するのだから…こういった無駄な支出でブレイブ家はなかなか領地拡大に至ることができないのだが、ヤンとメリーは今のままの大きさでも、ただただ皆が幸せに、何より子供無事にすくすく成長しているのだからこれぐらいはしなれば、と言っている…まあ、そんな親バカな両親がブレイブとリリウムは大好きなのであるが。

しかし誕生日会は夕食時、現在の時刻は午前、まだランチの時間には早い時間帯である。

それまでには格段やることはない…ということ、1日早め今日から魔法の練習を行うことになったのだ。

ちなみに彼はORCA旅団の頭脳、トップ2のメルツエルだ…彼はロマリアの異端査問によって領地を奪われ落ちぶれてしまったいわば貴族崩れだ、そのため彼と…彼の兄であるORCAリーダーのマクシミリアンは魔法が使える、さらにはメルツエルが水のスクウエア、マクシミリアンに至っては土と風のスクウエア…と、落ちぶれた貴族には過ぎた力を持っている…そのためロマリアに命を狙われ続け

ていたのだが、彼等はブレイ一家いわく「王になればその国は非常にバランスのとれた理想的な独裁国家となるだろう」と言わせている…彼等は策士、それも策士として一番敵に回したくない部類の性格だ。

だからこそORCAが最強の暗部組織として君臨しているわけだし、こうしてロマリアの追ってからのうのうと逃げ切れたのだ。

「うぬ…ブレイブ様は…すごいですね、特殊な魔法石を利用した剣と杖のハイブリッド型…いやはや、これを制作した人には拍手を送りたい。」

…と、ヤンにばれないようにメルツェルはリリウムにウインク…ORCAの策士としてこの剣の作成者も知っている、だが彼らの純粋な気持ち…「大きな力は時に不安を生む、そんな不安を親には抱え込んでほしくない」というリリウムとブレイブの配慮からORCA最高機密の1つとなっている。

そんなことを聞いたマクシミリアンとメルツェルは「本当に5歳にもなっていないのか？」と本気で疑ったのと同時に…ますますこの兄妹には興味を持った、今のメルツェルの興味の行き先はこの兄妹の未来とこの兄妹が…この世界にどんな影響を…革命を起こすか。

「リリウム様は…これも魔法石を利用してますね。…なるほど、これも杖と銃の一体型ですか。…これも興味がそそるすばらしい作品だ。」

もちろんこれもリリウム謹製である…このリリウムのマジックアイテムにかける才は目に余る、この歳で精霊の力を封じ込める技術、さらには見たこともない未確認な魔法石の作成…この歳で「革命」を起こしている…正直この才は多才と呼ばれるメルツェルでも嫉妬するぐらいだ。

「では2人は手始めにコモンマジックを覚えてもらいます。…とは言いましても、努力家である2人にとつては知識としては完璧でしょうから、私の実演を見てもらうだけでいいでしょう。」

コモンマジック…属性を関係なしに、大体のメイジが普遍的に扱える魔法…初步に覚える魔法、ともいえばいいであろうか。

コモンマジックは例外を含め8種類…ライト、ロック、アンロック、ディテクトマジック、念力、リードランゲージ、例外はサモン・サーヴァントとコントラクト・サーヴァントの使い魔召喚の際に使う魔法もコモンマジックである。

そしてそれをスタートに分岐するのが属性魔法…火、水、風、土、そして例外として虚無…ここでは虚無を省き説明することとしよう。実は、その者の魔法資質にもよるが、各々の属性の初步の初步の魔法は努力次第ですべて使えるようにはなれる、それも1カ月ほど練習すれば「ファイアーボール」、「ウインド及びサイレント」、またはフライ及びレビテーション」、「コンデイセイション」、「錬成及び固定化」は努力次第ですべて会得することができる…実際に、リリウムはサイレントを普遍的に使用していた、おそらくヤンが風のメイジであったためにその属性の適性を受け継いでいるせいもあるであろうがサイレントと固定化、錬金はおそらく魔法学院に通う頃には2分の1の生徒はマスターしているであろう。

「ではこれから…ライト。」

すると快晴の昼であるからして把握はしにくいメルツェルの杖の先が光っているのがなんとか認識できた。

これはライト、文字の如く明りを照らす魔法で、洞窟探検や薄暗い森に潜り込むときに使われる普遍的魔法である。

「ではまずブレイブ様から…といっても剣ですから、杖をお貸ししましょうか？」

「いや、心配無用。」

するとブレイブの腰に引っさげていた剣は一気に短剣：グラディウスサイズまで鞘ごと縮み、一般的な長杖と同じようなサイズとなった。

これはアマダムの力が関係してある…クウガタイタン、大地を司る勇ましき剣士…そのフォームが持つ固有武器「タイタンソード」は刃の伸び縮みが可能であることを利用し、試しにやってみたらできた…ということの基本はこの形態になるであろう。

「これはまた興味深い剣ですな。…ではブレイブ様、イメージしてください。杖の先に光が収束し、周りを照らしだすことを、そして自分の中にある精神力を前身に循環させる感じで。」

杖の先を光らせ周りを照らす…と聞いて、イメージしたのは懐中電灯だ。

確かに杖の先から光を放ち、杖の持ち方なんかは懐中電灯の持ち方に似ている面もあるからだ、この特有のイメージができるのも転生者の特権である。

「ライト。」

ブレイブの詠唱が終わると、剣先からまばゆい光源が発生した…成功である、微妙に前方向に光の方向が集中しているのはおそらくイメージしたのが懐中電灯であったからであろう。

「ブレイブ様は一回で成功ですか…本番はこれからです。次は…」

そう呟きながらメルツエルが懐から取り出したのは簡易性のカギがついている小箱であった。

これを見たとき大体何の魔法をするかは見当がつく。

「ロック。」

メルツエルの詠唱に呼応し小箱のカギは「かちり」と音を立てながら施錠され…

「アンロック。」

矢継ぎ早に詠唱された魔逆の魔法によって施錠は一瞬で解錠された。ロック…ドアなどのカギを施錠する魔法、アンロックは施錠されたドアなどを解錠する魔法である。

「この魔法はまだイメージがしやすいと思います。頭の中に対象のカギの姿をイメージし、それを施錠する時と解錠する自分の手をイメージしてください。」

これもイメージはしやすかった、ブレイブの転生前の世界には魔法なんて存在しない、故に施錠、解錠は自分の手で行っていた。ただそれを思い出せば、後は簡単である。

「ロック。」

その詠唱に小箱はまた施錠され…

「アンロック。」

施錠されたばかりのカギは再び矢継ぎ早に解錠された。

「これも難なくクリア。…ではディテクトマジックとリードランゲージは並行で行いましょう。」

これには理由がある、それはどちらも「情報を得る」という同系の魔法、どちらかが成功すればもう片方も成功しやすいからである。これに関してもブレイブは難なくクリア、東の国からもたらされたという書物の情報の会得及び内容の意味の把握もクリアした。

「では最後は念力です。魔法においての原点ですね。…これは私の持論なのですが、属性魔法の4割は、念力の応用である、と私は思うのですよ。」

たとえば水属性魔法のコンデイセイション、これは大気中の水分、いわば水蒸気を液体状態に変化させる魔法…だがどうやって水蒸気を集めているのか？これが疑問として湧きあがる。

ここで「水精霊の力」と普遍的なこと言うのもいいであろう、だがそこで思考停止してしまうのは「ユーザー」の考え方、メルツェルは魔法科学者として独自の切り口…魔法の原理というものを研究していた。

火の属性魔法であるファイアーボール、風の属性魔法であるウインドも同じ、なぜ大気を押し出すことができるのか？なぜ発生させた炎を操ることができるのか？もしこの魔法らに「念力」の効果が作用しているのだとすれば…そういった今まで考えないような切り口でメルツェルとマクシミリアンは研究していた…それに加えなまじメイジとしての力があり、さらにはほかの異端紛いのことに手を染めていた結果、ロマリアから命を狙われるようになったわけだが…これは余談である。

だがこの切り口からの理論は非常に納得できた、実際にあてはまるし、確かにどの書物でもそうだった「原理」を詳しくは書いていな

い、つまりは誰も「追及」したことがないジャンル、非常に惹かれた。

「と、小難しい理論はここまでにして…要約すれば、今から覚える念力というものを誰よりも極めれば？そうすれば、おそらくメイジとしての可能性を広げることができる、と自分は考えております。あくまで頭の隅に入れておいて、参考として下されば幸いです。」

「いえ、メルツェルさんの理論は非常に興味深いです…ただ、それはロマリアに命を狙われますよね。」

なにせ今までの魔法の原理は「精霊の加護」やら大気中に漂っている「微粒子」からだ、などあいまいかつどこか意思を感じさせるような知識の吹き込み…特に精霊の加護、という要素は宗教上大事にしてあるはずが「それは間違っている」と言われて始祖の信仰教徒が減ってしまったら？考えすぎではあるが、時代はいつも新しい考えを受け入れられないものである…ガリレオの「地動説」などがいい例であろう。

「まあ異端ではある、と昔から自覚はあったが…それでは、まずは実演から…念力。」

すると庭に堕ちていた普遍的な小石が浮き上がり…メルツェルはまるで走り回るウサギにめがけて放つように石を飛ばした。

「念力は使い方と極め方次第ではそれだけで戦える魔法です。先ほども言った通り応用も効きます。…では、そちらにある小石を浮かべてみてください。」

メルツェルの示す先にあったのは先ほどより一回り小さめの小石…浮かせる、というのはいまいちイメージが難しい、そんなことがで

きるのはまさに魔法使いや超能力者の世界であったからだ。

…さて、メルツェルの話を思い出してみよう、そう、「魔法の原理はいずれにあるのか」という話題であった…魔法の原理、そう、それはいわゆる「科学」である、化学現象によって何かが起きることによって火を操り、水を操り…すべては科学で解明される、とどこかのドラマで聞いたようなセリフだ。

だがこの考え方は非常にブレイブの助けになった、そもそもなぜ石やものは落ちるか、浮かぶことができないか？それは星のひっぱる力「重力」があるからだ。

ならば重力を操作するイメージでならどうだろう？石の真上に重力を想像することによって石を浮かせているのではなく石を力の流れにのっとらせる、あるいは重力に逆らう力のイメージが有効か。

…この試みは成功したようで、石はゆっくりと、しかし確実に浮き、ブレイブの身長の高さの半分の高度まで上げることが成功した。

「では先ほど私が放ったあの石にぶつけてみましょう。少々ハードかもしれませんがブレイブ様ならできるでしょう。」

先ほど放った石…となるとあそここの茂みのそばに落ちているあの石である、を認識する。

これはターゲットに向かって狙撃するイメージ、とはいっても生前、転生前に銃など握ったこともない、せいぜい射的でキャラメルを落としたりくらいだ、相手は動かないターゲット、だがこれから出会う敵はたいては動きまわるであろう…射的のイメージでならこの場合は成功するであろう、だが今学んでいるのは「未来」のため、妥協は許さない。

…と、ブレイブは生前の、それも今と同じ5歳ころの記憶をフィードバックしていた。

思えばあのころはまだ自分の住むところは田舎で遊び装具が少なく、自然と旧時代なおもちゃで遊んだものだ。

缶けり、縄跳び、どこかの友達がホッピングも持っていた… そうだ、パチンコだ。

思えば自分は少しだけ悪ガキであった、あのころはまだ「仮面ライダー」という存在に憧れていなかった時代、どうもこの時代の子供は生き物をいじめたがる歳で、よくパチンコで飛んでいるスズメに向かってパチンコで狙撃していた… そうだ、この時の記憶、パチンコで狙撃するようなイメージを持てば…。

その目論見は再び功を奏し、加速がついた小石は見事に先ほどの小石にクリーンヒットした。

「お見事ですブレイブ様。まさかこんなにつまきいくとは。」

「すごいです、さすがブレイブお兄様です。」

少しだけ浴びせられた称賛の声、だがまだランチの時間は遠い… つまりは魔法の訓練はまだまだ続く、そういうことだ。

「それではやっと本番、ブレイブ様の属性見極め試験を行いたいと思います。… そうですね、ここは初級の中での上位魔法に挑戦してもらいましょう。そうすればはつきりと属性がわかるはずなので。… ではヤン様が風のメイジ、ということ… ここは最初からストームから挑戦してもらいましょうか。」

ストームとは名の通り竜巻のごとく突風を生み出す魔法である。

この風のコントロールのレベルと風量からメルツェルは判断するらしい。

「では始めましょう。スペルは”イル・ウィンデ”です。」

「…イル・ウィンデ。」

と詠唱したまでは良かった…だが詠唱した瞬間、ブレイブは今まで感じたことのないような体に溢れる力を感じた。

先ほどまで行っていたコモンマジックとは格が違う量の精神力…それが一気に加速され体をめぐる感じが、そしてその精神力と比例し…目の前には、周りの植物を刈り取ってしまうほど強力な突風…否、暴風が巻いていた。

さすがにこれはやばい、とブレイブは精神力の循環をカット、その行動のおかげで竜巻はゆっくりとながらも消滅した。

「ブレイブ様！体は大丈夫でしょうか！？」

「…いや、今のところは何も。」

「…ディテクトマジック。」

何を思ったかメルツェルはディテクトマジックで自分の体について調べている。

そして彼は眉を寄せ…自分の中だとある仮説を打ち立てた。

「あのこの歳であるの風…なのに疲労はほとんどなし。…すいません、あの石に大して攻撃するイメージを持ちながら、これから行う詠唱を繰り返してほしいのですが。」

「わかりました。」

これはなんな面倒なことになってきた、と内心ひやひやしながら指令されたとおりにブレイブは詠唱を行った。

「我、風を愛し者、風に愛されし者。」

「我、風を愛し者、風に愛されし者。」

「戦いの意思を、現世に轟かせよ。」

「戦いの意思を、現世に轟かせよ。」

「一閃する雷光、ライトニング。」

「一閃する雷光…ライトニング！」

その詠唱が終了しそこにある石を攻撃するイメージを行うと…目の前の石に、とてつもない轟音をとどろかせながら落雷が一閃した。そしてその石は当然の高温の電気の塊に当てられ文字通り焼け石状態となった。

「…わかりました、ブレイブ様は生まれつき風のメイジとしての資質に恵まれていた…いや、このレベルまで来ればもはや風の精霊に愛された、ともいえるでしょう。」

「…風の属性を極めたものが行きつく一つの極み…ブレイブの属性は…雷。」

雷…そもそも雷を行使する魔法は風属性魔法の上位として存在し、雷を使えるものは風メイジとして1人前を超えた、ともいわれる。だがこのブレイブは5歳というコモンマジックすら習いたての子供、だがその子供がいきなりライアングルクラスの暴風を発生させ、上位魔法であるライトニングを無意識でコントロールしたのだ。

本来このライトニングの魔法は制御が難しく、熟練していないものが使用すると最悪自分の身に落雷させることもある危険な魔法、だがブレイブは5歳ながらも圧倒的に小さいターゲットである小石に、確実に、それも周りに被害を発生させずクリーンヒットで落雷を成功させた…もはや、風のスキルに関して最低でもトライアングルの下位、ライトニングの制御と今でもまだ精神力が有り余っていることを考慮すれば…

「おそらくブレイブ様は冗談なしで風のスクウェアの一步手前、否、もしかすれば…。」

5歳にして、強力な風を操りながら雷の加護設けた…過去何百年の

資料でも存在が1人しか確認されていない「忘れられた属性」…「雷」。

今はまだ経験不足、ということもあり風の魔法に関しては制御だけが不完全、だが1か月は鍛錬を繰り返し制御のコツをつかめば…ヤンの風を超えるメイジとなる。

「…これはまた一層と自慢な息子を持ったな。」

だが彼の顔は「自分おも超える息子を持った」という誇らしげな満足な顔と、ブレイブのこれから歩む未来に少々の不安を感じる一面であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9124z/>

Round ZERO 【ゼロとWな転生者】 《試験投稿中》

2011年12月29日07時49分発行